

## 書評「ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド」

川路則友 (森林総合研究所北海道支所)\*

Lars Svensson 著, 村田 健訳, 尾崎清明・茂田良光監訳, 文一総合出版,  
2011年10月, 343頁, 本体価格4,600円

多くの日本人バンダーが待ち焦がれていた一冊が出た。タイトルは「ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド」。本書はいわずと知れた Lars Svensson (ラーシュ・スベンソン) の名著「Identification Guide to European Passerines」増補改訂第4版の翻訳本である。スベンソンという名前は、おそらく日本のバンダーで知らない人はいないと言えるほど有名であろう。ただ彼の業績については私自身、恥ずかしながらこの原書以外にはよく知らなかった。本書の著者紹介文によると、スベンソンは分類学的研究で著名な研究者でスウェーデン野鳥記録委員会を設立したほか、イギリス鳥学会分類委員会委員、イギリス鳥学財団名誉バンダー、ウプサラ大学名誉博士などである。また本書の原書の出版により王立スウェーデン科学アカデミーから Letterstedtska Authorship 賞を受賞しており、ヨーロッパのバンダーの間でも原書はバイブルとされているという。それほどの名著である。

本書の原書は初版が1970年に出版されたようだが、残念ながら私は持ち合わせていない。私が最初にスベンソンに出会ったのは、表紙がオレンジ色の改訂第2版からである。それは1974年に出版されたが、私が手に入れたのは1981年である。その後、表紙があざやかな青色になった増補改訂第3版を1987年に入手した。しかしここまでは、実はあまり有効に使うこともなく、これらは車のトランクの中か本棚にむなしく鎮座していた。というのも、ヨーロッパで見られるスズメ目鳥類に関する識別ガイドであることから、当然のことながら、東アジアのみに分布する鳥類に関する記述がほとんどないので、普段なじみのない異国の鳥について難解な英語を苦勞して読んでもあまり役に立たないのではないかと思っていたからである。

しかし、実は本書はバンディングに必要な基礎知識がすべて詰まっている非常に便利な本なのである。すなわち、まず捕獲した鳥の持ち方から、形態、計測方法、性・齢の識別方法が分かりやすい図とともにこと細かく解説され、そののちに各種について、個別に種の識別、性、成幼の見分けポイントを丁寧に記述し、ときには肝心な部分、重要な識別点について焦点を絞った分かりやすい図を載せている。スベンソンはのちにアメリカの Peter Pyle にも大きな影響を与え、彼に「北アメリカのスズメ目鳥類の識別ガイド (Identification Guide to North American Passerines)」という類似書を出版させたほどである。また識別用として日本のバンダーにとって今でもなじみの深い図がこのスベンソンに多く見られる。頭骨の骨化指標 (skull ossification) や総排泄口の形状 (shape of the cloacal region) の図はとくによく知られている。実は第2版で最初にこれらの図を見たときは私自身、なかなか理解できなかった。

私がスベンソンに最初にお世話になったのは増補改訂第3版である。それは私が1987年に鹿児島県国分干拓で1羽の奇妙な鳥を捕獲したときであった。網にかかった鳥を一瞬見て、しばし悩んだ。シマセンニュウのような体型だが、なんと言っても羽色が全体に濃い。背中に縦斑があるがマキノセンニュウより明らかに大きい。その当時は現在のように識別に関する洋書を手軽に入手することがなか

なかできなかった。乏しい識別知識でいくつか鳥の名前を思い浮かべるがまったく一致しない。そのとき、わずかに1週間ほど前に購入したばかりのスベンソンを何気なく開いた。ばらばらとめくっていくうちにシベリアセンニュウの尾羽の図が目飛び込んだ。中央の1対以外の尾羽先端に白斑があり、その手前に横縞がくっきりある図である。手に取った鳥にもしっかりついている。そこから、シベリアセンニュウの本文をなぞる。読むごとにこの種の成鳥にぴったりの記述。期せずして短時間に同定でき、めでたく標識リングをつけることができた。蛇足だが、分布の関係からかスベンソンにはシマセンニュウの記述はない。このシベリアセンニュウの記録は、のちに山階鳥研報に短報として載せたが、いま読み返すと、そこにもしっかりスベンソンを引用している。本当にスベンソン様々であった。そのとき、この本を翻訳してバンダーに配ったら、どんなに喜ばれるだろうか、そう思い、山階鳥類研究所の尾崎清明さんに相談した。彼もそう思っていたようだ。すぐに同意してくれた。しかしいま考えると、それは至極当たり前のことで、当時のバンダーなら誰でもそう思っていたに違いない。ただ、このようなマニアックな本を誰が翻訳するのか、また外国人の著者との関係ということで著作権はどうなるのかなど、いざ翻訳本を出版するに当たり数多くの難問が存在するだろうことも容易に想像できた。それから20数年、やっと日本語で書かれたスベンソンを手にすることができた。さらには尾崎さんが監訳者の一人になっている。何とも言えず感慨深いものがある。

現代の日本はいくら国際社会の仲間入りと叫んでみても、やはり日本人にとっては世界のいろんな場面で不利なことが多い。その典型が外国語に対するコンプレックスである。当時の典型的な日本人教師による英語教育のなせるわざか、私は今でも英語では満足にしゃべれないが、そこそこには「読める」。前記のシベリアセンニュウのときのように、必要なときにだけ、必要そうな種のページ部分だけを辞書片手に拾い読みしていれば、それで事足りた（と思った）ことが何度かあった。しかし、英語はやはり私にとっていつまでも遠い異国語である。何度同じページを読み返しても、なかなか頭に入らない。内容を頭の中にしっかりインプットすることができないのである。

本書のスベンソンによる日本語版への序文、監訳者の序文、訳者のあとがきを読むと、翻訳に際して非常に苦勞したことが書かれている。とくに訳者は原書の表現について理解できない部分を著者との間で実に百数十通ものメールでやりとりしたという。まさに日本人バンダーを代表して、日本人になかなか理解できない表現をしっかり確かめてくれたのである。私がときおり原書を開いて、なかなか理解できないと思っていたのは当たり前だったようだ。構想実に10年、そのような大変な苦勞を経て翻訳が完成している。まさに根気強い努力を続けたうえでの結晶といえる。

今回の訳本の原書である増補改訂第4版は1992年に出版され、明るいグリーン色で、しかもビニールカバーがついてより豪華になっていた。原書では、種名は太字の大文字で書いてはあるが、他の文章に埋没してしまって、どこから次の種の記載が始まるのか迷ってしまうことがたびたびあった。英語に親しんでいる人では考えられないのかもしれないが、目的の種を見つける際に結構苦勞した。しかし、本書を初めて開くと、原書と違ってすぐに種名が見つけやすくなっているのに気づく。ちゃんと種名は太字で、しかも網掛けしてある。ちょっとした工夫だが、実にありがたい。

最近では、見応えのある地域版フィールドガイド、各分類群のモノグラフなどがさかんに出版されている。しかし、その中身はバンダーにとってそれほどかゆいところまで手が届くレベルには至っていないものが多すぎる。というより期待外れというものも少なくない。本書では、まず使用指針に「ある程度の基礎知識をもった読者を対象にしている。したがって主に羽衣の違いを示す形質を扱い、個々

の種の全般的な外部形態については詳述していない」とある。これがまた、捕獲した鳥体や標本を直接手にするバンダーなればこそ、よけいな記述なしに本書の内容がすんなり頭に入ってくるゆえんである。たとえば、ヨーロッパコマドリについて、上嘴の内側の色で成幼の区別ができるとの記述がある。これを最初に読んだときには感動した。さっそく捕獲したコマドリやコルリで試してみた。確かに黒っぽいものとうすいピンク色をしたものがある。カケスの最外側大雨覆羽に見られる黒帯の数で成幼に違いがあるのも初めて知った。それ以降、カケスがかかるたびに、すぐにそこを見てつい数えてしまう。このように野外での豊富な知見と数多くの標本観察に裏打ちされた知識は重みが違う。センニユウ属の幼鳥に見られる3つの暗色の舌斑、ヨシキリ属幼鳥の2つの暗色舌斑などについてはどのフィールドガイドでも見たことがない。もちろん通常のフィールドガイドは野外での野鳥観察者を対象にしているので、外から簡単に見えない部分の記述をしても仕方ないのだろうが、バンダーにとってはそこが欲しいし、バンダーならではの楽しみ(?)でもある。また、本書では時期による羽衣が種により微妙に記述が異なっているが、imm.と1Y-2Y springという原書での記載を「未成鳥」という便利な用語に当てはめている。これもわかりやすい。

序文には「原書にはない最新の図版を掲載した」とある。さっそく探してみた。まず127ページのマミジロノビタキの外側尾羽の図。親切に改訂されているとの訳者注がついている。そのほか数カ所で図の改訂箇所が見られた。これを見つけるのもまた楽しい。また、本書は、原書には229種掲載されているのを、日本で見られると思われる148種に限定したとある。しかし、たとえばカワセンニユウ(River Warbler)やヌマヨシキリ(Marsh Warbler)は入っているが、ヌマセンニユウ(Savi's Warbler)やスゲヨシキリ(Sedge Warbler)ははずしてある。私にはそれらの分布域がそう変わらないというか、逆に後2者の方が日本にはより近いように思えるのだが、それなりはかなり深い意味があるのだろう。確かに、とうてい考えられそうにない種まで記述しても日本のバンダーにはただ混乱させるだけという配慮はわかるのだが、一方では人間の活動範囲がここまで広がった現在では、どこでどんな種が現れるか想像つかない。巷(ちまた)には珍鳥奇鳥があふれている。そんなときに、ヨーロッパ産として取り上げられているすべての鳥についての知識はやはり最低限必要なのでは?と思うのはわがままだろうか。そこは原書でしっかり読みなさいと言われそうだが・・・

これまで本書はバンダーにとって卓越した名著だと書いてきたが、一方で、昨今の一部ウオッチャーによる観察識別能力の高さには実に驚かされる。これまで野外では識別困難といわれていたものでも、鮮明な写真等で微妙な識別点まで明らかになってきている。前述のようにバンディングは鳥体を手にとることにより、普通の野外での姿勢ではなかなか見ることができない部分の観察まで容易にできるのが長所の一つなのだが、もちろん野外で注目すれば何とか観察される点も少なくない。それこそ一瞬の観察で重要な識別点を見逃さない能力をもったウオッチャーにとって、ことによると非常に役に立つ知識も本書には満載といえる。この書評は日本鳥類標識協会誌に掲載されるのだが、そのようなバンダーではない一般の識別マニアにとっても、本書は垂涎の著となるのかも知れない。しかも的確な翻訳をされているのでさらに理解しやすいとすれば、もう申し分ない。

いいことづくめの本書であるが、一点気になることといえばサイズであろう。前述したように私は原書第2版から入手したのだが、第2、3両版は、実にコンパクトなサイズだったので、たとえば片手で鳥をもち、反対側の手でこの本をもってばらばらとページを開くことも可能だった。それに比べ、本書の原書版である増補改訂第4版は少し大きくなった。それでも無理をすれば何とか片手で開ける

サイズだった。おそらく欧米人の大きな手にはしっかりフィットし、フィールドでも平気で手軽に開けたであろう。しかし、本書になると、すでに立派な書物となっている。車のトランクにバンディング用具のすべてを放り込み、フィールドで不安定な姿勢でリング付けをやっていた昔と違い、立派なキャンプ用テーブルや椅子を使ってにわかステーションを作ったり、観察小屋のごとき立派な施設内でのバンディングがよく見られる現代では、じっくり机上で本書を開くスペースも容易にできているのかもしれない。まさに時代の産物であろうか。

いずれにしてもこんなに便利な訳本が出てくれると大変ありがたい。ますます原書が本棚に埋もれていきそうだ。ただこうなると、ほかにも次々訳して欲しい本が出てきそうである。訳者の能力を持ってすれば、たやすいことであろう。今後も手軽に日本語のバンダー必携の書が出てくることを心から期待したい。ただ、訳本を待たずとも本書に含まれていない東アジア特産種についての同様のガイドブックを独自に出版することは、現在の日本鳥類標識協会の経験と叡智を結集すれば容易なことではないだろうか。この方面からも大いに期待したい。